

落石金刀比羅神社

御創祀七十年記念誌

落石金刀比羅神社奉賛会

御
社
紋



落石金刀比羅神社御祭神

倉	ウカ	事	コト	大	オオ
稻	ノ	代	シロ	物	モノ
魂	ミタマ	主	ヌシ	主	ヌシ
神	ノ	神	ノ	神	ノ
	カミ		カミ		カミ

敬神生活の綱領

神道は天地悠久の大道であつて、崇高なる精神を培ひ、大平を開くの基である。神慮を畏み祖訓をつぎ、いよいよ道の精華を発揮し人類の福祉を増進するは、使命を達成する所以である。

ここにこの綱領をかがげて向ふところを明らかにし、実践につとめて以て大道を宣揚することを期する。

一、神の恵みと祖先の恩とに感謝し、明き清きまことを以て祭祀にいそしむこと。

一、世のため人のために奉仕し、神のみこともちとして世をつくり固め成すこと。

一、大御心をいただきてむつび和らぎ、国の隆昌と世界の共存共栄とを祈ること。





御創祀七十周年にあたって

落石神社七十周年記念祭

実行委員長 佐藤 藤 作

日本最東端の地根室も、今や稔りの時期を迎えて、最も美しい秋空の下に、力強い息吹きが続けております。

当落石もまた、活気に溢れて生産の意欲に満ち満ちております。

さて、遠く神社史を省り見ますと、明治四十四年十月十八日に、当地西百六十二番地に、故山崎其次郎氏が、村の平和と産業経済の発展を祈念し、且つ御本人の崇高なる敬神の基に社殿を造営いたし、事代主神を祀って落石神社の誕生を見たわけであります。

爾来、七十年の今日、ここに、その歴史と、社殿造営二十周年の祝典を開催できますことは、この上ない喜びとするものであります。

今、落石の歴史を紐解くとき、私共が肝に銘じて忘れることのできないのは多くの先輩の労苦であります。

おそろくは、言語を絶する自然環境のなかで、七転八起の辛苦をなめながら、幾多の障害と対決し、それらを克服しつつ今日の落石を築かれました先人の労苦は、まさしく、筆舌に尽し難い苦難の連続であり、深く刻み込まれた開拓の歴史なのであります。

そうした辛苦を乗り越えてきたものは、勿論、先輩のたくましい開拓魂であることは言をまちませんが、併せて神々を信ずる篤い信仰心が、その支えとなってきたものであります。

今、小高い丘に立つて落石を見渡すとき、そこには、近代建築に色どられた平和な家庭の軒並みが連なり、舗装された一筋の道が根室市につながり、更には遠い道程へのつながりをみせてます。

転じて、港を見渡すと、近代装備を整えた科学船ともいふべき小型、大型の船々が、豊漁と安全に満々の自信をたたえてその勇姿を

横たえております。

おそろくは、過去の落石を知る人々にとつて、その姿はまさしく天地の差をおぼえることであります。

そうした物的条件を満たしてくれた基盤は、なんといっても、先輩のフロンティア魂であったのでありまして、その精神力の支えこそ、深い信仰心であったのであります。

現在、日本は、世界のあらゆる国々からうらやまれる物質豊かな国であります。

ともすると、物質文明は、人間の精神文化を犯すことになりかねません。

世界の各国が、日本の豊かな発想力と、働くことを嫌わない勤労意欲にクレームをつけて、日本の将来に大きな歯止めをかけてきております。

今こそ、私共は、先輩の遺産ともいふべきたくましい開拓魂と、深い信仰心をもって、日本人本来の姿にたちかえつて、新たな世紀に向けて力強く歩むべきであります。

そうした時期に、本神社の七十年の歴史を祝うとともに、先人先達の労苦を偲ぶことができましたことは、まことに、意義深いことであります。

ここに、改めて、先輩の功を讃え、併せて、私達郷土の隆々発展を祈願いたしますとともに、本記念行事を成功裡に催すことのできました町民諸氏に、深甚なる謝意を表して御挨拶いたします。



落石神社御創祀七十周年並びに 社殿造営二十周年記念を祝して

芥 儀 一

昭和三十三年より四十八年まで、十五年間にわたって、当神社の庶務会計をつとめさせていただいた者といまして、この度の祝賀式典には、ひとしお感銘を覚えるのであります。

当神社は、明治四十四年、故山崎其次郎氏が發起人となり、地域住民各位の協力を得まして、氏神とし、守護神としてお祀りされたのがはじまりでありまして、爾来七十年、新社殿御造営より二十年の歴史をお祝いできますことは、誠に御同慶の至りであります。

前社殿は、数十年を経まして、老朽甚しく、且つ、参詣者の収容も狹隘なるため思うにまかせず、昭和三十二、三年ころより、急速に改築の要望高まり、再三氏子総代会を開きまして、機熟する昭和三十七年、新殿御造営を決議いたしましたして、前田宮司殿の御幹旋と御指示のもとに、専門大工八戸市中村松次郎氏に依頼着工の運びとなったものであります。

この間、前総代長惣万惣吉氏、現総代長佐藤藤作氏外総代各位の並々な御苦心があつたことは言うまでもありません。

昭和三十七年十月、総桧造り、銅板屋根にて見事に新社殿竣工いたし、同月十日に遷座祭を盛大且つ厳肅裡に執り行ないまして、氏

子一同の安堵と歓びに一人でありまして、誠に慶びに堪えない次第でありました。

神社造営にあたって忘れることのできないことがもう一つあります。

それは、用地確保についてであります。現総代長佐藤藤作氏が中心となりまして、根室営林署その他関係諸機関に数度にわたる交渉を続け、遂に用地確保の成果をあげ、続いて神社庁に上申、落石金刀比羅神社として正式神社の資格を得、ここに名実共に落石神社は承認神社として発足をみたのであります。

今や、元日祭、並に秋の例大祭には参詣の人々旧に倍し、敬神の念もまた一段と高まりまして、地域発展の守護神として、ゆるぎない基となっております。

茲に、御創祀七十周年、社殿造営二十周年の記念式典を執行するにあたりまして、尚一層敬神の念を深くするとともに、益々神導興隆と国家安泰を祈念致し、併せて当地域の発展並びに、御家庭の平和を祈念いたしましてお祝いの言葉といたします。

歴代神官

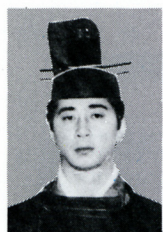
祠官 渡辺 千石
明治二十三年着任

祠官 前田 鴻
明治二十八年着任

祠官 前田 修
大正五年着任

名誉宮司 前田 誠
昭和二十八年着任

宮司 前田 康
昭和五十二年着任



祭典奉仕者

根室雅楽寮 宮崎 義信

西條 篤次郎 松葉 寿吉

須藤 利夫 宮腰 隆

米田 卓一

落石神社の祭典は、例年九月十九日、二十日の両日にわたって催される。

歴代神官の方々は、必らずこの例大祭に、奉仕者の方々とかけつけていただき、盛大且つ厳肅に式典が挙行される。

本神社が、公認神社としての本目であるのも、更には、新社殿の二十周年を迎えられたのも、これ一重に、歴代神官の方々が及び、奉仕者の方々のお力によるものである。

今後、これらの方々には、より一層お世話になることでありましょう。

御創祀七十年をお祝いするにあたって、改めて厚くお礼を申しあげる次第です。

むかしのわが郷土 落石のあゆみ

(大正年間まで。資料落石漁協発行「おちいし」による。)

年 度	あ ゆ み
寛 永 二 年 (一六四三年)	オランダの探険家フリースは、東海の新島探険のため根室を訪れる前々日の六月十一日に、落石岬を望見して、マンスホフト岬(人頭岬)と名づけている。これが、落石を最初に世界に紹介したものである。
文 化 五 年 (一八〇八年)	根室・厚岸間に道路通い、落石を中間とする。
文 化 六 年 (一八〇九年)	落石に番屋ができた。番人二人、夷人七十人。主としてマス漁であった。
安 政 五 年 (一八五八年)	四月二十二日、松浦武四郎が根室入りの途中、オッチシ洞窟に一泊し、当時の模様を次のように述べている。 オッチシには、番屋一棟、板倉一棟、茅倉一棟、土人小屋があるも、建物すべてせまいため、洞窟にムシロを張り一泊する。二十三日未明、ホノツ、コンブウイムイを通り、ヨタノシケを渡りてチヨブシにたどり着く。

年 度	あ ゆ み
明 治 元 年 (一八六六年)	請負人山田文右エ門が支配、当時、鮭角網が昆布盛に一ケ統、浜松に一ケ統、長節に一ケ統。昆布場を、昆布盛、浜松、長節、ユル島に置く。
明 治 三 年 (一八七〇年)	佐賀藩の支配となって、生産の二割を税として収めることになるが、生産地相場が安い上、出荷運賃が高く、漁業者の生活は実に悲惨なものであった。
明 治 五 年 (一八七三年)	漁家二十戸ありという。根室に開拓支庁が置かれたが、落石村、昆布盛村は厚岸管轄であったため、公用は浜中榊町まで行かねばならず、まことに不便であった。
明 治 九 年 (一八七六年)	落石村、昆布盛村をあわせて漁家二十戸余りとなり、隣へ行くにも容易になった。
明 治 十 一 年 (一八七八年)	道路が新設され、落石、初田牛に郵便局が置かれ、生活面でも若干のゆとりがでてきた。
明 治 十 三 年 (一八八〇年)	根室国、釧路国の境界を、初田牛字ヲワタラウシとする。同時に隣の根室町に郡役所がおかれ、公用は根室においてできるようになった。 同じ年の七月にアメリカ測量船が沖合にて濃霧の

年 度	あ ゆ み
明治十四年 (一八八一年)	ため座礁、漁民は全て官命により、漁を休んで、これが救助にあたった。
明治二十年 (一八八七年)	落石、昆布盛の二村が厚岸郡より分れ、花咲郡に編入された。 この年、海岸線づたいに、電信線が架設された。
明治二十一年 (一八八八年)	落石村、昆布盛村の漁夫取締りのため、漁期中、請願巡査を置いた。この派遣費用は、五十円であったという。
明治二十二年 (一八八九年)	落石村に、缶詰所ができた。
明治二十三年 (一八九〇年)	和田村に戸長役場が置かれ、落石村、昆布盛村も、和田村で公用ができるようになった。
明治三十四年 (一九〇一年)	十月十五日、落石灯台落成点火される。 昆布盛村より落石街道に通ずる道路を私費にて拓き、交通の便よくなる。
明治三十九年 (一九〇六年)	八月に有志より寄附を集め、長節より国道に至る道路を百二十円で完成。この道路完成によって、長節、根室間は馬車による運搬となった。

年 度	あ ゆ み
明治三十七年 (一九〇三年)	三月二十二日、大地震あり、全員屋外に避難した。野宿すること二日間、この間実に五十数回の地震あり、人々はまさしく生きた心地もなかったという。
明治三十八年 (一九〇四年)	十月二十日、根室町大火。焼失家屋六六二戸の多きにわたり、再起不能かとも思われる大火災であった。
明治三十九年 (一九〇五年)	この年、根室に水上警察所が生まれた。
明治四十年 (一九〇六年)	五月五日、落石に簡易教育所が生まれ、はじめて、子弟の教育の場ができた。
明治四十一年 (一九〇七年)	これが、現落石小学校の歴史のはじまりである。
明治四十二年 (一九〇八年)	六月一日、落石簡易教育所が、落石尋常小学校に昇格した。
明治四十三年 (一九〇九年)	ここに、名実共に公立学校の基礎が生まれたことになる。
明治四十四年 (一九一〇年)	二級町村制が施行され、戸長役場を廃して、和田村役場となった。
明治四十五年 (一九一一年)	落石村、昆布盛村が根室郡に編入された。

年 度	あ ゆ み
明治四十二年 (一九〇九年)	落石岬に無線電信局が設けられた。 この無線局は、車に、海上安全のみならず、日本の重要な連絡局として活躍した。
明治四十四年 (一九一一年)	故・山崎其次郎氏が發起人となって、有志相集い海上安全、家内平和を祈願して、事代主神を御祭神とする神社を造営する。 これが、現落石神社のはじまりである。 その後、大物主神、倉稲主神をお祀りし、御祭神三体が祀られている。
参 考	
明治十四年 (一八八一年)	現在、北方領土返還のため、国をあげて運動を展開している。 当落石にも、いわゆる島の引揚げの方々が住んでいるが、明治十四年に文部省が制定した小学校唱歌第二十二番「螢」のなかに、千島がうたわれている。(現在は、螢の光として歌われている) 四、ちしまのおくも おきなわも やしまのうちの まもりなり いたらんくにな いさをしく つとめよわがせ つつがなく

年 度	あ ゆ み
大正元年 (一九一二年)	資料によれば、この年の落石尋常高等小学校の児童生徒数は、男子四七名、女子四六名とある。 更に、八年後の大正八年には、男子六七名、女子六九名とあって、戸数の増加が目立っている。 尚、校舎敷地一、一〇〇坪、建物の総坪数は五〇坪であった。
大正五年 (一九一六年)	東洋捕鯨株式会社が、昆布盛に捕鯨事業所を設け、その処理にあたった。
大正十年 (一九二一年)	根室本線が、根室市まで延長され、落石駅が誕生した。 交通の不便はこれによって解消され、住民の生活も一段と向上した。
大正十四年 (一九二五年)	東洋捕鯨株式会社が、昆布盛事業所を廃して、霧多布に移転した。
大正十五年 (一九二六年)	この年、現天皇陛下が、摂政の宮様として根室を訪れる。 これを記念して、長節沼の周囲にさくら、かえでなど、約二、〇〇〇本を移植し、盛大な記念事業とした。



昭和6年
落石婦人会創立記念

会 長	鈴 木	マ ツ
副会長	成 田	キ イ
	白 川	リ セ



落石無線電信局跡



落石無線電信局開局 明治41年12月26日

落
石
今
昔



現在の落石港

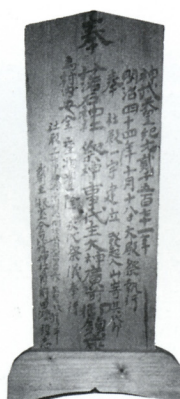


改築前の落石小学校

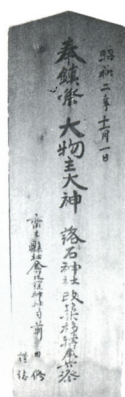
沿革の大要



山崎 其次郎



創祀当初の棟札



昭和2年11月1日
大物主大神鎮座
社殿移転改修誌

年 月 日	沿革	沿革
明治四十四年十月十八日	創祀	当落石地区は、敬神の念深き者多く、神社設立の要望高まるを以って、故山崎其次郎氏發起人となり、有志浄財を募り、地を落石西六十二番地（現前川武氏附近）を下して、祠宇を建立、事代主大神を奉斎して、落石神社と呼称す。
	社殿建立工事	施行者 吉川利藏 側棟梁彫刻 黒田正作 監督 坂口与平
昭和二年十一月	鎮座地移転	参詣者の便を望む氏子の要望により、落石小学校校舎移転を機に、その跡地を借り受けて移転、改築建立する。（現参集殿附近）
	大物主神奉斎 落石金刀比羅神社と改称	大物主神を奉斎して御祭神を二神となし、社名を落石金刀比羅神社と改称する。
	落石青年会結成、祭典奉仕	神社整備に伴ない、青年層の多数参加を期する為、青年会を結成する。 これにより祭典は一層の賑わいをみせ、地域挙げて祭典参加の基礎がつくられた。



昭和25、26年頃 青年会、はなやかなりしころの祭典風景



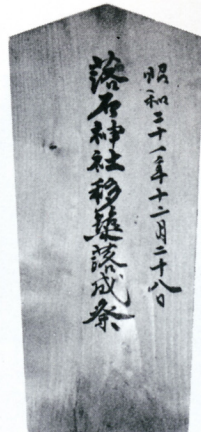
手 水 鉢

昭和六年九月

		手水鉢献納	
		納主	会長 石黒晋平 副会長 佐藤作 他会員 四十五名
重久佐市	浜屋吉次郎	山崎善次	菊地三次郎
	矢飯尾邦太郎	成田隆治	丸勢善一郎
		高屋英二	



昭和二十三年九月十一日祭典



昭和十八年頃の神社

昭和二十二年	昭和二十五年	昭和二十一年七月 九月	昭和十八年十二月
境内地借用許可を受く	役員改選	社殿移転改築 倉稻魂神奉斉	神社境内地として許可を受く 境内参道用地 取得
昭和三十三年四月当地区は、根室町と合併、根室市となり、従来借用の神社用地は根室市の所有となるため、交渉の結果、引続き神社用地として、無償借用の許可を受ける。	神社維持興隆を期するため、役員を選任す。 会長 惣 万 惣 吉 副会長 佐 藤 藤 作	従来奉斉の二祭神に併せ、倉稻魂神を奉斉し、三祭神とする。 昭和十八年取得せし境内地に社殿造営す。	国有保安林、八林班の内、約一反歩を根室営林署より神社境内地として無償借用の許可を受ける。 山崎菊次郎氏より、参道用地として百五十坪購入す。 右により、新社殿建立及び諸施設充実の礎ができる。

昭和八龍知神 手置祝賀神
本鎮祭落石金刀比羅神社新築社殿
屋敷聖家姫神 表紙知神

上棟祭棟札



抗 打 の 儀

昭和三十七年

社 殿 造 営

社殿腐朽甚しく、改築の要望強くなりたるため、役員会に於て協議の結果之が改築の議を決し、社殿造営委員会を構成し、会長、惣万惣吉氏、副会長、佐藤藤作氏を推し、造営完遂を期することとなる。

社 殿 造 営 委 員 会

会 長 惣 万 惣 吉
副 会 長 佐 藤 藤 作
委 員 会 員 濱 谷 政 次 郎
濱 屋 政 夫
淺 野 良 雄
小 松 崎 松 次 郎
松 坂 保 雄
石 田 権 作
濱 屋 巖
長 谷 川 春 吉
芥 儀 一

濱 屋 作 次 郎
魚 谷 直 助
丸 勢 善 一 郎
松 川 留 吉
紫 竹 清 吉
濱 屋 久
長 谷 川 正 昭
室 屋 幸 雄

六月二日

工 事 経 過
(設計施工)

設計・施行は、根室金刀比羅神社宮司前田誠氏に謀り、宮大工八戸市在住中村松太郎氏に交渉、六月三日同氏との間に工事契約を結ぶ。

工 費 四百五十万円

造営様式 神明造り

使用材 津軽ヒバ材



上棟祭 散餅散銭の儀

昭和三十七年七月三日

(基礎工事
着工)

施行者、根室市 望月 喜作

八月二十八日

(御神体奉遷)

御神体を根室市金刀比羅神社社殿に奉遷す。

九月六日

(宮大工来落)

八戸にて切込みたる材を持ちて、中村松太郎氏はじめ、宮大工九名来落す。

九月二十日

(上棟祭)

午後一時、役員崇敬者多数参列の下盛大に執行す。この日、好天に恵まれ、斉主前田誠宮司をはじめ米田卓一、宮崎義信、斉員奉仕の下、直垂に身を正した中村松太郎氏等により、千歳棟、万歳棟、永々棟の掛声とともに、槌振う棟打の儀、四方清め祓いの散餅、散銭の儀、凡て古式にのっとり、厳肅盛大裡に執行された。

十月十日

(新社殿竣工)

凡て工事竣工したるを以つて、前田誠宮司、米田卓一斉員奉仕の下、新殿清祓の儀を斉行し、遷座祭儀に備える。

十月十一日

(遷座祭)

午後一時、総代役員等、根室金刀比羅神社に参集し、八月同神社に仮鎮座の御神体に対し、今より新殿に奉遷の旨、奉告の儀をなし、遷座の儀に移る。



上棟祭



上棟の儀

昭和三十七年十月十一日（遷座祭）

役員に警護された御神体は、前田誠宮司に奉持され、警蹕の声とともに、同神社参道を下り、同神社第一鳥居前よりバスにて、午後三時落石市街地に到着、再び行列を整えて参進、木の香漂う新殿に鎮座さる。

氏子一同かねてよりの念願叶い、凡て格式に合った社殿造営完成の歓びをかみしむ。

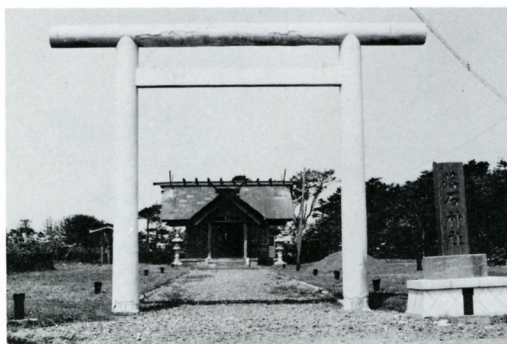
之、氏子の敬神の念深き故にして、永く郷土史にとどむるところとなる。



完成なった新社殿

社殿造営奉賛者

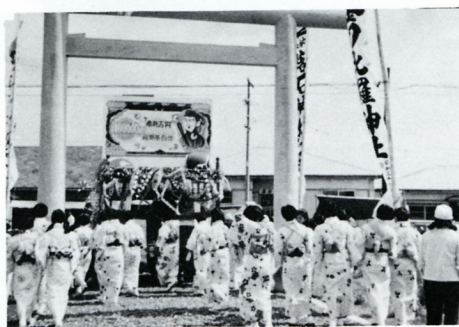
奉 賛 金	氏 名
一金 貳百萬円也	落石 鮭 鱒 部 会 九 名
一金 壹百五十萬円也	惣万 惣吉殿 浜屋 久殿
一金 六拾六萬貳千九百円也	浜屋 巖殿 魚谷 直助殿
一金 参拾壹萬四千五百円也	浜屋 政夫殿 浅野 良雄殿
一金 貳拾八萬円也	石田 權作殿 庄林 政治殿
一金 五萬七千円也	浜屋 作次郎殿
一金 貳拾萬円也	落石 漁業 協同 組合殿
一金 六拾萬円也	昆布 閑係者 一 同殿
一金 四拾萬円也	落石 地区 町民 一 同殿
一金 貳拾萬円也	商店 閑係者 一 同殿
一金 五萬七千円也	浜松・昆布 盛有志 一 同殿
一金 貳拾萬円也	根室 漁業 協同 組合殿
一金 六拾萬円也	根室 市 有 志 一 同殿
一金 四拾萬円也	浜屋 久殿
一金 参拾五萬円也	魚谷 直助殿
一金 参拾萬円也	惣万 惣吉殿
一金 貳拾萬円也	浜谷 政次郎殿
一金 貳拾萬円也	浜屋 巖殿
一金 壹拾萬円也	浜谷 一郎殿
一金 五萬円也	浅野 良雄殿
	石田 權作殿



鮭鱒部会奉納の大鳥居



祭具庫



昭和四十四年十二月

昭和四十二年

昭和四十一年

昭和三十九年

昭和三十七年九月

九月

葺 施 工
社殿屋根銅板

社殿屋根を銅板を以って葺く。
寄 進 者

大鳥居献備

奉納者

大太鼓献備

参道に縁石を設け、玉砂利を敷き整備す。
施行 日本ヒューム管KK
拝殿に大太鼓献備す。

参道整備

社名額献備

拝殿前向拝に社名額献備す。

祭具庫建立

祭典用具等格納のため、祭具庫建立す。
二間×四間 八坪 工費 六拾八萬円

会長改選

惣万惣吉氏、奉賛会長の職を退き、代って、佐藤藤作氏会長に就任す。

賽銭函献納

納 主 佐藤藤作

浜屋 久 惣万惣吉
浜谷 政次郎 浜屋 一郎
浜屋 巖 庄林 政治
石田 権作 浜屋 政夫
浅野 良雄 魚谷 直助
工費 五十萬円



祭典には、小・中の子どもたちが全員参加となった

	昭和四十五年六月		大型鯉鱒部会 五十万円 氏子寄進者 四十五万円
	石燈籠一対 献備	納主 浜谷 政次郎	
昭和四十九年四月	境内地取得	かねて使用中の境内地、落石東二八七番地の内、 九百九十坪を神社用地として有料払下げ申請の ところ許可され、神社財産となる。 地積 三、三〇〇平方メートル 払下代金 二四六、七〇〇円也	
七月十五日	境内地境界排水工事 社名碑献備	全長 二百九米七〇 請負人 堀内 市松 工費 拾萬四千八百五十円也 納主 浜谷 政次郎	
九月	手洗屋根作成 祭典日変更 宵祭十九日 本祭二十日	工費 四萬二千五百円（施工 橋本幸太郎） 従来祭典は、九月十日宵宮祭、十一日本祭儀の所 長節、昆布盛、浜松の各神社と祭典同日執行の議 が決し、本年より、九月十九日、二十日の二日間 全神社統一祭典執行となる。	

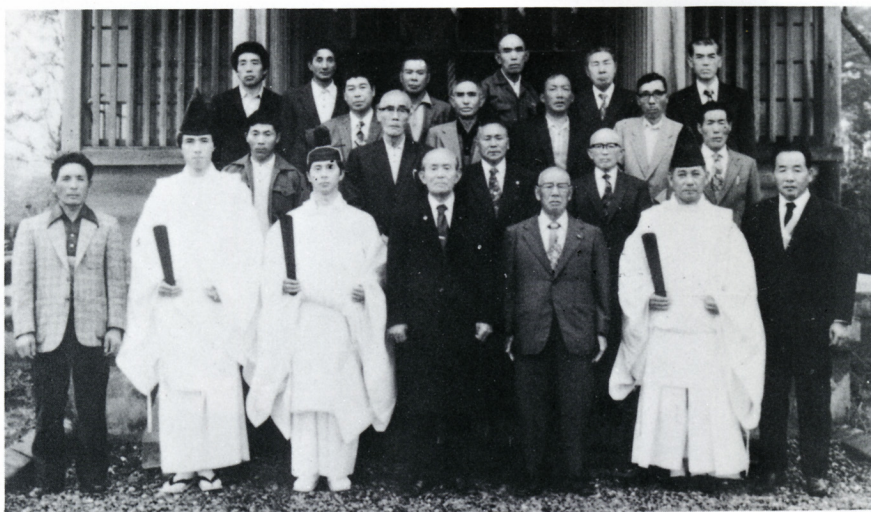


昭和49年度役員



参集所

昭和五十年 五月三十一日	役員改選 神社一層の充実を期するため、役員改選を行う。 会長 佐藤 藤作 副会長 浜谷 政次郎 役員 芥 儀一 長谷川 正昭 芥 悦郎 石田 権作 室屋 幸雄 浄土 富雄 根室市役所より落石東町内会館木造亜引平家一六五㎡を五萬円にて購入。 右会館を屋根その他参拾萬円の工費をもって補修の上、参集殿とする。
昭和五十一年 十二月二十日	「宗教法人・落石金刀比羅神社」として公認さる 社殿の造営、境内地の取得、諸施設の充実等、凡て神社としての設備充実せるをもつて神社本庁に對し、公認神社認可申請中のところ、認可を得、北海道知事の認証を得て、茲に、名実共に神社本庁に包括される神社として設立するに至る。 これひとえに、六十有余年に亘る氏子崇敬者の敬神の致すところと信ず。 代表役員 前田 康 責任役員 佐藤 藤作 濱谷 政次郎



昭和五十二年九月十九日

公認神社
認証奉告祭

昭和五十二年

全国神社総代
会組織に加入



総代 石田 權作 長谷川 正昭
〃 室屋 幸雄 浜屋 巖
役員、総代、有志集り、前田康宮司齊主となり、
「公認神社認証」の旨、奉告祭執行する。
芥 悦郎

公認神社の責任役員及び総代は、全国組織の神社
総代会、及びその支部組織たる、根室支部神社総
代会に加入の規定により、全員加入す。

落石神社祭、昭和五十五年九月二十日
獅子頭 奉納者 坂井正幸・浄土富雄・北皇一



社殿大幕一張 加藤三之丞・加藤ナミ
北海道神社庁長 前田 勝也
受賞者 石田 権作

昭和五十五年五月

九月



奉納 剣道



小学生山車

神鏡 献備	獅子頭 献備	社殿大幕 納	手洗舎幕 納
奉賛会より献備	主 坂井正幸	主 加藤三之丞	主 加藤ナミ
	浄土富雄		
	北皇一		



中学生による踊り



社殿控室

山車



街のあちこちでの踊り

整然とした行進



昭和五十五年九月

社殿控室増設

工費 五拾萬円を以って設置
施工 加藤 三之丞

主たる奉納物

年月日	奉納物	奉納者
明治四十四年	御神鏡	山崎 其次郎
昭和六年九月	手水鉢	長谷川音吉 高屋 英二 名達要次郎 丸勢善一郎 菊地三次郎 成田 隆治 山崎 善次 飯尾 茂助 浜谷吉次郎 矢原邦太郎 重久 佐市
昭和三十九年九月	賽銭箱	佐藤 藤作
昭和四十二年	大太鼓	奉賛会
九月	大鳥居 (五拾萬円)	浜屋 久 浅野 良雄 浜屋 巖 浜屋 一郎 浜屋 政夫 石田 権作 惣万 惣吉 庄林 政治 魚谷 直助 浜谷政次郎

昭和四十五年六月	石燈籠 一對	浜谷 政次郎
昭和四十九年七月	社名碑	浜谷 政次郎
昭和五十五年九月	社殿幕 手水舎幕	加藤 三之丞 ナミ
昭和五十五年	獅子頭 一對 (参拾萬円)	北 皇一 坂井 正幸 浄土 富雄
昭和五十四年六月	フェンス工事 幟立工事	参道二十間両側鉄製工事 総四十間 鉄製パイプ埋込十四本 壹百万円
昭和五十六年九月	控室二坪新築	加藤三之丞実費にて請負 四八五、六一〇円



昭和28年 献納された手水鉢

山崎其次郎氏献納御神鏡



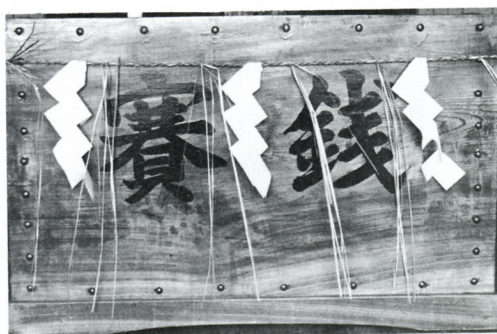
手水鉢



昭和45年 浜谷政次郎氏奉納



昭和49年
浜谷政次郎氏



昭和39年 佐藤藤作氏奉納



昭和55年 手水舎幕 加藤三之丞・ナミ氏



昭和55年 社殿幕 加藤三之丞・ナミ氏

記念事業計画

一、記念式典

昭和五十七年九月十九日午後一時より
神社本殿にて式典挙行。

一、記念祝賀会及び表彰式

昭和五十七年九月十九日午後二時より
落石会館に於て開催。

一、祭典

九月十九日 宵宮祭
九月二十日 本祭(御輿・パレード)
九月二十一日 後日祭

一、記念誌発行

「御創祀七十周年記念誌」の発行。

※ 尚、本式典及び祝賀会は、御創祀七十周年、新殿
御造営二十周年をお祝いするものである。

記念式役員 (敬称略・順不同)

顧問	浜谷政次郎・芥 儀一
奉賛会長	佐藤 藤作
奉賛会副会長	室屋 幸雄・佐藤 功
責任役員	佐藤 藤作・浜谷政次郎
総代	石田 権作・室屋 幸雄・長谷川正昭・芥 悦郎
式典係長	浄土 富雄
式典係	石田 権作
祝賀係長	菊地 要一・坂井 正幸・浜谷 満・新酒 正
祝賀係	河原 貢・北 皇一・丸勢 一男・寺島 得三
	佐藤 武男・岸本 末治・熊谷 進・田沢 戈市
	田塚 一夫・宮下 繁・岸本 一英・惣万 照昭
	長谷川正昭
	北 勝彦・浄土 実・丸勢 幸男・新酒 健
	石堂 弘・熊谷 武雄・富田 清・北 孝二郎
	熊谷 登・前川 武・橋 善一郎・紫竹 勉
	畑沢 繁・中野 忠勇・松川 久義・高橋 豊
	室屋 義則・佐藤 勝芳・中野 謙二・石黒 信雄
祭典係長	浄土 富雄
祭典係	佐藤 勝利・成田 辰夫・浜辺 洋一・勝又 三次
	浜屋 進・惣万 与吉・小松崎敏雄・石田 寛
	宝田 吉一・水口 正一・浅野 良雄・佐藤久四郎
	中野 勝平・成田 辰夫・新酒 健・浅野 政光
	高橋 幸光・佐藤 勝利・惣万 司・吉田 勇造
記念誌係長	芥 悦郎・佐藤 昇・坂井 実・佐竹 秀勝
事務局	水口 清一
	大広 毅・宗沢 伸次

記念式予算

一、式典費 二〇〇、〇〇〇円也
式典挙行費・謝礼関係・その他

一、記念誌 四〇〇、〇〇〇円也
三〇頁記念誌三〇〇冊・編集費・その他

一、祝賀会費 三〇〇、〇〇〇円也
祝賀会パーティ費・来賓接待・その他
(参加者一〇〇人として)

一、一般記念品 二〇〇、〇〇〇円也
一戸一、〇〇〇円として二〇〇戸分

一、功労者表彰費 二五〇、〇〇〇円也
記念品・賞状(四十一名分として)

一、予備費 一五〇、〇〇〇円也
印刷・郵便・その他

合計 壹百五拾萬円也

表彰者御芳名

(奉賛会長佐藤藤作氏より)
(順不同)

●特別表彰者 佐藤藤作殿

(名誉宮司 前田誠氏より)

故山崎 其次郎殿	故石黒 晋市殿	故遠藤 隆治殿	故能戸 直太郎殿	故浜屋 吉次郎殿	故浜屋 磯次郎殿	故惣万 惣吉殿	故菊地 三次郎殿	故魚谷 直助殿	故浜屋 巖殿	故長谷川 音吉殿	故紫竹 清吉殿	故室屋 善太郎殿	故新浜 要惣殿	故浜屋 作次郎殿	故井上 治三郎殿	故丸勢 善一郎殿	故浜屋 由次郎殿	故小松崎 松次郎殿	故松川 留吉殿	故坂井 久之助殿	故長谷川 春吉殿
浜谷 政次郎殿	芥 儀一殿	菊地 要一殿	石田 権作殿	室屋 幸雄殿	浄土 富雄殿	北 皇一殿	庄林 政治殿	浅野 良雄殿	浜屋 久殿	加藤 三之丞殿	坂井 正幸殿	長谷川 正昭殿	浜屋 一郎殿	芥 悦郎殿	大津 芳雄殿	根室 雅楽寮殿	落石 漁協殿	落石 大型	鮭鱒部会殿		

編集後記

根室の秋はすばらしい。

その美しさと、あたたかさと、長さは、おそらく全道一の秋であらう。

その澄み切った秋空の下で、御創祀七十年、御造営二十年の式典を催すこともまたすばらしいことである。

なにか、物事をやるとき、いろんな論議は出るものの、決まると一直線にそれに向っていく落石の人々のエネルギーには、いつも敬服している。

今度のこの記念誌にしてもそうである。

創るべきだ、創ろうと決ってわずか二ヶ月の間に、ごらんのように多くの資料があつまって、立派な記念誌が誕生した。

佐藤総代長さんの熱心さ、前田誠宮司さんの適切な御指導の結晶である。

一般の記念誌と違って、専門的とも言える神社史を創ることはむずかしい。

それだけに、いろんな手落ちがあちこちにある。

然し、一つの資料にはなる。

歴史を省り見る糧にはなるであらう。

関係各位の御協力を感謝しつつ後がきとする。

(宗 沢 記)

記念誌編集委員

委員長	宗 沢 伸 次
副委員長	大 広 毅
委員	石 田 権 作
	長谷川 正 昭
	室 屋 幸 雄
	浄 土 富 雄
	芥 悦 郎

「落石金刀比羅神社

御創祀七十年記念誌」

題字(菊地要一氏)

発行 昭和五十七年九月二十日

発行責任者 佐 藤 藤 作

印刷 太洋印刷株式会社

(0153)3137